

AG5

大連日本人学校の取組

バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成を目指して

テーマの設定

A G 5の目標

「日本人学校における
バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、
そのための教員研修のプログラム開発」



大連日本人学校のテーマ

「劇的に変化する国際社会の中で、
生涯にわたって自身の良さを生き生きと
発揮できる子どもの育成」

実態把握（そのⅠ）言語能力

※本当に日本語の能力が高いのか？

★「DLA <はじめの一步>」

「語彙力チェック」→全校の児童生徒に実施

【結果】

▶ 正答率	小学部 1 年生	85%以上
	小学部 2～4 年生	95%以上
	小学部 5～6 年生	ほぼ 100%
	中学部	ほぼ 100%

日本語の語彙に関わる実態と課題

【推察】

- ▶ 「語彙チェック」から、
本校において、児童生徒の生活言語の語彙力は
非常に高いことがわかった。

しかし、研修・アンケートによる教員の意見

- ▶ 授業の中で、聞き取りや語彙の活用などについて、
課題が見られる。

→日本語の学習言語の語彙力には課題がある。

実態把握（その2）児童生徒の意識

※児童生徒が「生涯にわたってよさを発揮するために」

→自己理解（自己肯定感）

→他者理解（自他の価値観を尊重し、よりよい人間関係を築く力）

★「自己肯定感や学習意欲についてのアンケート」を実施

【結果】

- ▶ 一部の設問を除き、全体的に高評価 →自己肯定感は高い
- ▶ 小学部低～中学年「すぐにあきらめてしまう」という項目に落ち込み
- ▶ 小学部高学年「すぐにあきらめてしまう」という項目は上向き
- ▶ 小学部中～高学年、中学部と、学齢が高くなるにつれて「表現・コミュニケーション」に対する苦手意識が高くなる傾向

児童生徒意識に関わる実態

【推察】

- ▶ 小学部低～中学年では、すぐにあきらめてしまう傾向にある
→（成功体験が乏しいなどの理由）
- ▶ 中学年以降は、あきらめずに挑戦する
たくましさが増えつつある
- ▶ 中学年以降は、
嫌なことを外に出さず、内面に秘めてしまう傾向が強い

児童生徒意識に関わる課題・必要な資質

児童生徒が日本や国際社会の中で良さを発揮するために

「自分自身の個性や良さを理解していること」

「相手の価値観を理解・受容した上で

自分自身の価値観を尊重し、

よりよい人間関係を築く力」

2019年度 3つの重点課題

(1) 在籍学級における日本語支援

◇朝学習 = 教科学習と関連付けた内容

◇視覚的アプローチ = 指示・情報資料など

(2) 日本語で考えや思いを適切に伝える表現力の育成

◇表現活動の充実 = 書くこと・話すこと・話し合い等

◇思考の視覚化 = 効果的な「対話」をめざす

本校の研修と深い関連

(3) 自己肯定感の伸長

◇道徳・特活の充実 = 価値観の受容・自己肯定感の伸長

◇コミュニケーションスキルの育成 = トレーニング等

授業実践 (研究授業の実施)

(1) 小学部 1 学年 国語科

単元名「くらべてよもう」 教材名「じどう車しらべ」

授業者：赤地由衣

- ▶ 国語科の目標「『しごと』と『つくり』を捉えて書く」
- ▶ はしご車の『つくり』を付箋に書き、友人と交流（対話）
- ▶ 「わたしも同じです。」の「～も」を学び、活用する。
→読み取りを深め、学んだ語彙を実際に活かす効果
(より確かな定着)

授業実践 (研究授業の実施)

(2) 小学部4学年 国語科

単元名「リーフレットを作ろう」 授業者：佐藤静子

- ▶ 国語科の目標「リーフレットについて、
良い点や改善点を伝え合う」
- ▶ 良い点を黄色い付箋、改善点を白い付箋で伝え合う
- ▶ 他者の意見を聞き、自分の考えを深める
→立場や考えを視覚化し「対話」をより効果的に行う

授業実践 (研究授業の実施)

(3) 小学部 6 学年 国語科

単元名「自然に学ぶ暮らし」 授業者：馬淵奈央人

- ▶ 国語科の目標「交流の中で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。」
- ▶ 意図的なグルーピング
- ▶ 役割分担の明確化
- ▶ 色画用紙を活用した児童の意見の視覚化
→効果的な「対話」により、自身の考えを深める

授業実践

自己肯定感・コミュニケーションスキル

(4) 中学部 特別活動

グループエンカウンター等のトレーニング

授業者：北村雅俊

▶ エゴグラム

→エゴグラムを活用し、自分の性格・友人の性格を理解

▶ プラスのストローク

→相手をほめることの有用性を理解 = 表現方法・自己肯定感

▶ 傾聴

→他者を意識して積極的に「聴く」ことを理解

▶ 怒りの温度計 (アンガーマネジメント)

→自分の感情を理解・管理し、適切に伝える

授業実践

自己肯定感・コミュニケーションスキル

(4) 中学部 取り組みの成果について

中学部の「総合的な学習の時間」の発表会に向けた取り組み

◇日本語の学習言語能力に課題がある生徒

→「言葉にこだわり時間がかかる」＝「時間をかければできる」（自己理解）

→国語科をはじめ、授業の「対話」から言語が定着＝自信につながる（自己肯定感）



「好きなことに打ち込んで、楽しく豊かな人生を送る」
という理想の生き方（将来の夢）を発表

2020年 今年度の実践

▶ (1) 実態の把握・課題の共有

→新小1へのDLA語彙チェックの実施

→JSL評価参照枠（ルーブリック）による課題の共有

▶ (2) 単元構成・授業づくりにおける課題克服の工夫

→「①つかむ・わかる」「②つかう・伝える」

「③広げる・深める」「④評価・動機づけ」の4観点

▶ (3) 道徳・特別活動の充実

→中学部を中心にトレーニング等の充実

4 観点について（資料）

【1】「つかむ・わかる」

学習課題を把握する。どのような学習を通して、何を身につけるかを理解する。
既習事項・生活経験などと学習を結びつける。

基礎的な知識・学習言語の習得（教員による視覚的アプローチ・反復学習等）

【2】「つかう・伝える」

身につけた知識・言語等を活用した学習。（思考力・判断力）

他者意識を重視した表現の工夫（発表・プレゼン・スピーチ等）

双方向に意見を伝え合う活動等。（※話し合い活動）

【3】「広げる・深める」

他者の意見や思いを理解して受け止め、自身の意見や思いと比較し、自身の意見・思い・価値観を深める機会の設定。

話し合い活動・振り返り・ワークシート等。

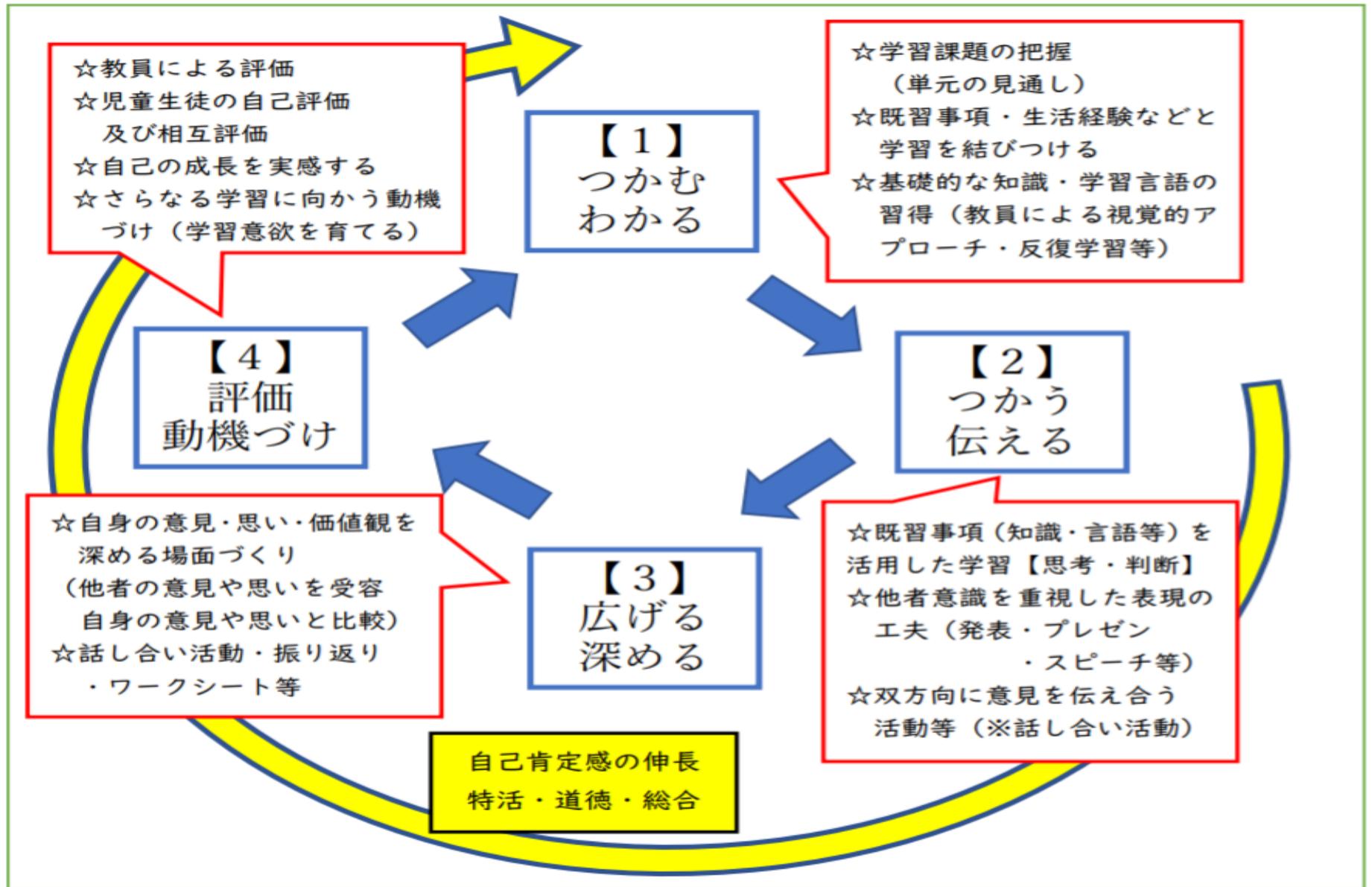
【4】「評価・動機づけ」

教員による評価。児童生徒の自己評価及び相互評価。

自己の成長を実感するとともに、さらなる学習に向かう動機づけを行う。

（学習意欲を育てる）

単元・授業づくりの構造図（資料）



ご静聴 ありがとうございました。